令和５年度第１回

# 松本市総合教育会議会議録

松 本 市 教 育 委 員 会

# 令和５年度第１回松本市総合教育会議会議録

令和５年度第１回松本市総合教育会議が令和５年５月２４日午後３時００分市役所第一応接室において開催された。

令和５年５月２４日（水）

議　事　日　程

令和５年５月２４日午後３時００分開議

１　開　会

２　あいさつ

３　議題

「探究的な学びとリーディングスクールの挑戦」

４　閉会

〔構成員〕

| | |
|---|---|
| 市長 | 臥雲義尚 |
| 教育長 | 伊佐治裕子 |
| 教育長職務代理者 | 小柳廣幸 |
| 委員 | 佐藤佳子 |
| 〃 | 春原啓子 |
| 〃 | 福澤崇浩 |
| 教育顧問 | 荒井英治郎 |

〔事務局構成員〕

| | |
|---|---|
| 副市長 | 宮之本　伸 |
| 総務部長 | 中野嘉勝 |
| 教育次長 | 逸見和行 |
| 教育監 | 坂口俊樹 |
| 行政管理課長 | 松本志保 |

〔事務局〕

| | |
|---|---|
| 教育政策課長 | 小西えみ |
| 教育研修センター長 | 大久保和彦 |
| 教育政策課 | |
| 教育政策担当係長 | 伏見宏美 |
| 教育政策担当係長 | 降籏　基 |

≪開会宣言≫　午後３時００分

教育次長は令和５年度第１回松本市総合教育会議の開会を宣言した。

逸見教育次長　ただいまから令和５年度第１回松本市総合教育会議を開催いたします。

私は意見交換の開始まで進行を務めます、教育次長の逸見和行でございます。本日はリモートで荒井教育顧問にもご参加いただいております。よろしくお願いいたします。

最初に、この会を主宰する臥雲市長からご挨拶をお願いします。

臥雲市長　本日はお忙しい中、令和５年度第１回総合教育会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。

前回は「地域に開かれた学校教育について」というテーマで、中学校の部活動の地域移行について闊達な意見交換をしていただきました。今回は「探究的な学びとリーディングスクールの挑戦」というテーマで意見交換をさせていただきます。

松本市は、教育委員会の皆様と公教育の多様化の取組みを進めているところですが、今年度、県そして市独自に探究的な学びの取組みを積極的に進めている学校をより掘り下げ、最終的には全ての小中学校に取組みを広げていきたいと考えております。

今日は具体的な事例についてご紹介いただきながら、委員の皆様からご意見をいただければと思いますのでよろしくお願いいたします。また、荒井教育顧問には専門的な知見から助言をよろしくお願いいたします。

逸見教育次長　続きまして、教育長からご挨拶をお願いいたします。

伊佐治教育長　ただいま市長からもお話がありましたが、これは学校教育の多様化という市長公約を実現していく柱になる取組みだと思っております。本日の議題である「探究的な学びとリーディングスクールの挑戦」の「挑戦」という言葉が、私はいいなと思っております。

ともすると、学校現場が、教育の継続的な安定性や安全性などを理由に、前例踏襲になりがちだったり、かつての教師主導の画一性・均一性を重視した教育がまだ根強く残ったりしていることが、今の学校の子どもたちの息苦しさにつながっていると感じております。

改めて、今回の学習指導要領の中に「探究型の学び」が位置づけられ、松

本市教育大綱でも、子どもが中心となる学びの実現が重要施策に掲げられています。その重要施策の一つがリーディングスクールMatsumotoサポート事業であるわけですが、まずは市長に、この事業に対して今年度１，２００万円という破格の予算を付けていただいたことをお礼申しあげたいと思います。

学ぶことが楽しいと思える、そして、学校の先生方も子どもたちと一緒に学ぶことが楽しいと思える、そんな学校をつくる挑戦に手を挙げてくれた学校の取組みを応援していくことを、今日は皆さんと確認し合えればいいなと思っております。どうぞよろしくお願いします。

逸見教育次長　それでは早速議事に入ります。

本日の議題は「探究的な学びとリーディングスクールの挑戦」でございます。初めに大久保教育研修センター長から松本市の課題である探究的な学びと、今年度スタートしましたリーディングスクールMatsumotoサポート事業についてご説明申しあげます。

その後、教育委員の皆様との意見交換を行い、荒井教育顧問からもご助言をお願いしたいと思います。

それでは大久保センター長から説明をお願いします。

大久保センター長　今日は、前半で、リーディングスクールMatsumotoサポート事業に寄せる願い、松本の学校教育においてシンカさせたいものについてお話させていただき、後半ではこの事業の仕組み、概要と現状の取組みについてお話をさせていただきたいと思います。

ご承知のとおり、松本市は令和３年度の中核市移行に伴い、教職員研修を独自に実施することとなりました。その企画・実施機関として令和４年度に教育研修センターが立ち上がり、昨年度、教職員の研修計画を策定し、令和５年度から実施しています。

研修の目的は、松本市教育大綱の基本理念である「子どもが主人公」の教育の実現です。全ての研修は、これを最上位の目標として実施しています。そのために、４つの重点、「子ども観」、「授業・指導観」、「教師像」、「学校像」を置いております。ここでは、リーディングスクールで目指す学校の姿に関わり、この４つの観点からお話をさせていただきます。

まず「子ども観」です。「子ども観」は、子どもをどのような存在として

捉えるか、ある種、教師・人としてのあり方を決定するものと考えます。子どもという存在の認識のあり方が「子ども観」です。これは教員として、あるいは人としてのあり方に深く関わるものであり、また、人として教師としての成長とともに深化していくものだと考えます。

これから、２つの異なった子ども観を挙げたいと思います。

１つ目は、子どもは未熟で不完全な存在、道徳的にも劣っている、大人が教えない限り子どもは学ばないし学べない、人と違ったところは矯正して鍛えなければならないという子どもの捉え方です。これはどちらかというと、これまでの教育の歴史の中で主流であった考え方、あえて「旧来の子ども観」という言い方をさせていただきます。このような子ども観からは、分かるように正しいことを教え導き、間違ったことをしないように管理しなくてはいけない、教育によって均質な姿にしなければならないという子どもへの関わり、スタンスが導かれます。

もう１つの子ども観は、全ての子どもは生まれながらにして有能な学び手である、尊敬に値する道徳性を持っている、学びたい、よりよい存在になりたいという切ないほどの思いに満ちている、一人ひとりの違いはかけがえのなさとして大切にされるべきという子ども観です。

もちろんこれまでも心ある先生方は持っていた子どもの見方でありまして、これから主流になっていってほしい考え方と考えております。ここでは「子どもの尊厳を尊重する子ども観」とさせていただきます。この子ども観に立ったときに、子どもの良さや輝きが見えてくると考えます。どの子どもも持っている良さを見出して伸ばす、子どもが自分の良さを自覚できる、そして子どもの主体性を引き出す、そんな子どもへの関わりが生まれてくると考えております。

残念ながらこれまでの学校には、あるいは現在でも、旧来の子ども観に立った教育のありようが色濃く残っていたと言わざるを得ません。そして、本当に気をつけないと、この子ども観が私たちの心の中にふっと湧き上がってくることがあります。これは教師、大人にとって非常に都合の良い子どもの見方だからです。子どもが悪いとか、保護者が悪いとか、他責的になれる見方です。本当に心して乗り越えて行かなくてはいけないと思っております。

松本市では子どもの権利条例を制定しています。教育大綱にもその前文を掲載し、基本理念としています。『すべての子どもが健やかに成長し、自由に自分を表現していく、身近な大人の支援を受け、「自分らしさ」を認められていく、松本は「すべての子どもにやさしいまち」をめざします。』

全ての学校がこの子ども観に心の底から推移し、運営されていくことを願っています。

続きまして、「授業・指導観」のシンカについてお話をしたいと思います。

「授業・指導観」は、子どもに育む資質・能力をどのようなものとして捉え、どのような授業を通してそれを育むのかという基本的な考え方です。

まず、これからの時代に求められる資質・能力について簡単に確認したいと思います。

世界的な気候変動や、世界秩序の枠組みの変動など、予測困難な時代の到来を目の当たりにしているところです。情報化や技術革新は、本当に加速度的に進展しています。この世の中で、言われたことを正確にできたり、一定の基準に沿って判断したりする、いわゆる正解のある仕事が、もはや機械にとって代わられると言われております。機械が代行できないものとしては、クリティカルな思考で価値を判断するとか、価値そのものを創造していく、あるいは二者択一ではない納得解を創出していく、正解のない問いに向き合い問題を解決していく力が、これから必要になってくると言われております。

これまでは、いかに用意された正解を求めることができるかに力点が置かれていた反省があります。知識、技能といったコンテンツを蓄積することが、学びの目的になりがちであったという反省があります。それに対して、これからの学びは、一定の知識や技能を基に活用し、周囲の人々と良好な関係を築き、自分の願う人生を実現していくマインドセットを身につけていくことが大切です。そして、知識や技能を活用した問題解決を通して、自分や社会の幸せな未来を切り開いていく。そんな意欲や姿勢を含めた力、「エージェンシー」が必要になっていくと言われております。

松本市教育大綱でも、生涯の学びを支える非認知的能力がこれまで以上に必要と述べています。非認知的能力とは、いわばテストの点数等にはあらわれにくい、個人の特性として備わっていく資質や能力と考えております。も

ちろん知識や技能の大切さは、当然これからも変わることはありません。大切なのは、それをどのように獲得していくかです。

学習指導要領では、これからの時代に必要な資質・能力をこのように整理しています。「知識・技能」は、何を理解しているか。「思考力・判断力・表現力」は、理解していること・できることをどのように使うか。そして、「学びに向かう力　人間性等」は、どのように社会につながり、よりよい人生を送っていくかという力です。

これらの資質・能力を、教科の学習内容や、道徳や特活など、学校に関わって行われる全ての活動を通して育む。それらを主体的、対話的で深い学びの中で学ぶことにより身につけていくとしています。

では、主体的・対話的で深い学びとはどういうものかという問いが立ち上がってきますが、学習指導要領の作成に深く関わられた上智大学の奈須正裕先生は、「この資質・能力を育むための学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことであり、特定の指導方法ではない」とおっしゃっています。

もう少し詳しく申しあげますと、子どもの確かな理解、思考力、表現力、判断力、そして学びに向かう姿勢をいつも私たちが育もうとしているかを、常に問い続けながら授業を工夫していくことであり、そのためには私たちが子ども観や学び観、教師像を問い続けて学び続ける必要があると考えます。

いわゆる良い授業の要件を、私は次のように考えております。まず、考えたくなる問いや必要感があること、そして子ども同士のかかわりがあること、さらに、学んだよさを振り返る要素があること。いわば必要観、対話・表現があり、深い実感があるという授業です。毎日積み上げられて行く授業を、このような授業にしていくことが大事だと思っております。

今、全国的に、子どもを主体にした、いわば子どもに学習の主導権を委ねた授業実践が行われております。それによって一層の資質・能力を伸ばす試みです。

例えば、問いを立てて自分の答えを探し求めていく「探究の学び」、そして、これまでの一斉授業と違い、全員が同じときに同じことをという同時性から解放され、様々な事情を抱える子どもが自分のペースで、自分の願う内

容を自分が考えた順番で学ぶ「自由進度学習」、また、子どもが授業の方法や流れを考えて先生の代わりに行う授業の実践もございます。さらに「異年齢学習集団による学び」。ここでは、自然に上級生のサポーティブな姿勢が形成されると言われております。いずれにしてもその上位の目標は、子どもが幸せな人生と社会を実現していく力を付けることにあり、そのための学びの改革へのチャレンジと考えております。

ここでさらに詳しく、探究的な学び（Project Based Learning）について説明させていただきます。

「探究的な学び」とは、自ら問いや課題を見つけ、それに基づいて情報を収集・整理しながら、他者と議論・協力し、ときには振り返りながら、自分独自の最適な答えを見つけ出していく学びであり、用意された正解を探す学びではない。それにより主体的に学ぶ力や思考力・表現力、協働的に学ぶ力が育っていくと言われております。

基本的に探究的な学びは、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」というプロセスによって行われます。「課題の設定」では、身近な事象や出来事から自分自身で探究すべき問いを設定していく。「情報の収集」は、ＩＣＴを活用する場合もありますし、図書館や、地域の人に聞くなど、いろいろな方法が考えられますが、自分で考えて情報を集めていきます。さらに、集めた情報を精査し、考えを交換しながら分析して、問題の解決、自分なりの答えを見つけようと取り組む（整理・分析）。最後にその取組みの成果をまとめて、他者に向けて表現していく（まとめ・表現）。その過程でリフレクションが行われていきます。

このプロセスをらせん状に繰り返していくことによって、子どもの資質・能力の高まりを目指していく。これが探究の学びのイメージです。まず、自分事として物事を考え、意欲や概念を深めていく。そして、学んだ良さを自覚することで「正解のない問いに粘り強く取り組む力」等の、これからの時代に必要な資質・能力を育む学びです。

「探究的な学び」は、実は松本の学校でもこれまでも取り組まれてきております。例えば、清水中学校では、子どもが問いを立てて情報を収集する探究のプロセスを自覚して学習に取り組むことで、学び方を身につける学びに

挑戦をしています。特に県ケ丘高校や信州大学の学生と交流し、学び方についての刺激を受けたり、課題の設定の仕方を相談してフィードバックを得たりなど、高校・大学との連携による効果的な学びを推進しています。清流の時間と呼んでおります。

丸ノ内中学校でも昨年から探究の学びへの挑戦を始め、特に３年生が学級単位でそれぞれが見出した課題に挑戦した学び（忠恕の時間）がございました。下級生にその魅力を伝えた場面に立ち会う機会があり、その際、３年生の子どもたちに、「忠恕の時間を来年からなくすって校長先生が言ったらどうする？」と聞いたところ、むきになって「それは困る」と。「私たちの成長に、なくてはならないものだと思います」と非常に熱く語った子供たちの姿が印象的でした。

鎌田中学校では、コロナ前には学年を超えた縦割りのグループで地域と関わり、地域とともに活動をつくり上げる学びを実践していました。現在でも学級単位で地域の人、物、事と関わりながら自分たちの課題を追求して地域のよさを実感する学びを実現しています。このような学びの姿を全ての学校に広げていきたいという願いがございます。

続きまして、「学校像」のお話をさせていただきます。

学校は何のためにあるのかという問いが立ち上がります。今改めて学校が何のためにあるかと言ったときに、子どもたちを幸せにするため、子どもたちの「今」も「将来」も幸せにしていく力を付けるためという答えになると考えます。精神的、身体的、社会的に一定の満足した状況、子どもたちが自分と社会のＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇを実現する力を育むのが学校であること、突き詰めて言うと、子どもたちの幸せを実現するのが学校の究極の目的だということを改めて認識したいと思います。

伝統的な日本型学校教育では、知、徳、体を一体で育む全人教育を目指し、海外から高い評価を得ている一方で、みんなで同じことを同じように、を過度に要求する面が見られて同調圧力を感じる子どもが増えていったという指摘もあり、それがいじめや生きづらさにつながっている、あるいは非合理な精神論や努力主義などもあったという反省もございます。

未来の学校は、子どもを自立的な学習者に育てていく。全ての子どもが自

分らしくいられ、自分に合った学び方で学び、生きる力を伸ばせる場所であってほしい。子どもが主人公の学校、松本の全ての学校をそのような学校へシンカさせていきたいというのがリーディングスクールへの背景であり願いでございます。

続きましてリーディングスクールサポート事業の仕組みについてお話をさせていただきたいと思います。

まず事業の全体像です。出発点は、各学校あるいは松本市の課題意識です。松本の教育課題に関わり、データから分かることを触れたいと思います。

令和３年度のコロナ禍で行われた全国学力学習状況調査の児童生徒質問紙の集計から、課題と思われる点をまとめました。

まず１番、「学習の結果を見返して次の学習につなげていくこと」について、確かにそうだ、まあそうだ、あまりそうではない、全くそうではないの４段階で、県や全国と比較してもやや低い傾向にございます。そして２番目、「自分と違う意見について考えるのが楽しいと感じている」、３番目、「友と話し合うことのよさを感じている」子どもも若干低めでした。関わりながら学ぶ楽しさが十分に味わえていない状況があるのかなと。４番目、「総合的な学習の時間で課題を立て、情報を集め整理し発表する探究的な学びができているか」という質問に対しては、松本の子どもの回答はかなり課題があると考えられます。

探究的な学びの実践が不十分であると考えざるを得ないところです。このように、自分で学び方を工夫したり、目標を立てて自分で学習の見通しを立てたりといった、自立的に学ぶ学びに向かう姿勢、学びの調整力が弱いという課題が見られました。

ちなみに先ほど紹介した探究の学びを展開している中学校については、全国の上位県と同様の結果となっています。

このように課題意識を明確にすることが改革への第一歩ですが、校長先生や先生たちが課題意識を持ったとしても、これまでの教育の在り方を変えていくのは大変なことで、エネルギーが必要です。そのために市が様々な施策を通して学校の主体的な取組みを支援し、学校の改革を進め、その成果を市全体に広げることで、学びの改革の機運を市全体に広げていくことを事業の

目的としております。

具体的な方策は４点あります。

まず、学びの新たな仕組みづくりを支えるための人の資源として、非常勤講師を４校に配置しました。また、研究推進に当たって指導者を招いたり、先進校を視察したりするための費用を８校に助成しています。さらに、学びの改革を進めるための先導者をアドバイザーとして依頼し、様々な機会に指導をいただきます。全国的に活躍されている４名の先生方に依頼しております。上智大学の奈須先生、大阪の大空小学校の初代校長で多様性を包み込む学校づくりに力を発揮された木村泰子先生、長年松本のご指導をいただいている、子どもと教師の心のふれあいを大事に考えてご指導いただいている岩川直樹先生、そして、探究の学びの先進校である風越学園の岩瀬直樹校長先生の４名にお願いしています。

さらに、各学校の取組みを交流したり、市全体に広めたりする機会を設けてあります。６月１５日には第１回リーディングスクールラボとして中間発表会を予定しているところです。

この事業がスタートして２か月になりますが、各学校の取組状況を一部紹介したいと思います。

まず探究の学びです。松本市では今年度探究の学びを中核においた学校づくりを、軽井沢風越学園と連携して進めております。具体的には、学校視察や教職員研修・交流、研究推進の支援、校内研修での講師を依頼するなど、探究を実践する教師の力量を高めることを進めております。

そのほか、各学校の課題意識に対応した特色ある学校づくりにチャレンジしているところです。

寿小学校では自由進度学習への挑戦をしております。筑摩野中学校では子どもたちの対話を基盤とした関係づくりを協働的な学びとして実現しようとしております。明善小では既に２年研究を進めていますが、幼保小の学びの連続性による子どもの育ちを追求しています。開成中では学校という存在の捉え方の変換を教師全体でチャレンジしようと動いています。

最後に市教育委員会としての支援についてお話をさせていただきます。教育委員会の直接支援としましては月一度のミーティングをオンラインで開催

し、各学校からの情報交換、課題や悩みについて協議いただいたり、市から連絡したりと、ネットワークの形成を図っているところです。また、担当の指導主事を決め、定期的に学校訪問を行い、様々な相談に応じたり、必要に応じてアドバイスを行ったりしています。

情報発信も心がけております。できるだけ高頻度で、各学校の実践校の様子をウェブページで紹介していきたいと思っております。毎週月曜日に更新しています。

もう１つはリーディングスクール通信を発行しています。各学校の詳細な取組みを紹介し、いろいろなところで参考にしていただける内容にしたいと思っております。月に２回ほどの発行を考えています。

最後に効果検証です。３年生以上の全ての児童生徒へのアンケートを実施し、自己効力感や学習の動機づけの傾向、マインドセットの状況など、非認知的能力を定量的かつ定期的に評価して効果検証の一つに位置づけていきたいと考えております。学校に負担がかからないようにＩＣＴを活用して、集計・分析等も市教育委員会で行い、その結果を各学校へフィードバックをしていきたいと考えています。

以上、リーディングスクール事業への願いと取組みの概要について報告いたしました。どうもありがとうございました。

逸見教育次長　ありがとうございました。

それでは、意見交換の進行につきましては、臥雲市長にお願いいたします。

臥雲市長　今、大久保センター長から今年度から本格的に取組みが始まっている松本市の探究的な学びへの実践について説明をいただきました。皆様から感想、疑問点、要望など、様々な観点から質問や意見をいただければと思いますが、小柳委員、口火を切っていただけますか。

小柳委員　２つの点についてお願いします。

まず、この事業がうまく進んでいってほしいと強く願っております。リーディングスクール事業に手を挙げる学校はそれぞれの願いがあると思います。校長先生を中心に、この事業をきっかけに子どもたちの学びを深める取組みを行い、学校運営の柱にしていこうと考えている学校があったり、既に実践の第一歩を踏み出していて、さらに研究を深めていこうと考えている学校が

あったりと、名乗りを上げた学校はそれぞれの実情を基に取り組み始めていると思います。

一方で、現場の先生方に思いをはせると、この事業の趣旨は十分理解していながらも、目の前の子どもたちに深く関われば関わるほど、子どもたちが抱えている課題の多様さや複雑さに戸惑い、思い切って研究に取り組めない先生方もいるかもしれません。今年度、事業の指定を受けた学校はもちろん、指定を受けていない学校でも、そのような先生方に、子ども観、教師像、学校像の転換に向けた意識づくりを、ぜひ日々の実践の中で、ことあるごとに取り上げていただくようお願いします。

もう１点は、今年度リーディングスクール事業に取り組んでいる学校の校長先生からは、できれば２年ぐらい継続したいという声も聞きました。しかし、次を待っている学校もあると思います。決められた枠の中での事業ですので、より効果を発揮する上で、実践校の発表会の充実や取組みについての情報発信の工夫をしていただき、指定を受けなかった学校でも実践校の成果が生かされるようにお願いします。各学校では、自校の実情に合った形で、リーディングスクールの成果を取り込んでほしいと思いました。

臥雲市長　ありがとうございます。まず１点、趣旨は賛同できても現場の子どもの課題は多様、複雑で、理想とする対応に至らないという戸惑いは学校現場にあるのではないかというご指摘でした。

そして、対象になっている学校以外に対して、情報発信などで横展開し、全ての学校に広げていくということ、単年度で終わらせるのではなく継続させ、対象校を広げていくことを含めてのご指摘だったと思います。

現場の戸惑いという点で、大久保センター長どうでしょうか。

大久保センター長　学校で課題になるのは、リーダー層の願いを先生みんなが共有していく、一枚岩になっていくというところをどのようにしていくか、これは恐らくこの取組みのスタートに当たっての最大の課題であると思っております。ただ、最初は皆さん心配されていますが、情報共有している限りは何とか頑張っているところでございます。

意識改革が大事とよく言われますが、とにかくまずはやってみる。まずはやってみて、変わったところで、行動したことによって変わったその良さを

分かち合うことで次の一歩が進んでいく。それによって考え方も変容していく。これが意識の改革につながると思います。現場の課題、目の前の課題が大きければ大きいほど、まず何かみんなでやってみようということが非常に有効になっている。このスタンスで、各学校で小さな一歩を踏み出す。小さな一歩がなければ次の大きな一歩というのは踏み出せないと思っておりますので、そんなことを共有しながら進めていきたいと思っております。

私の耳に届かないだけで、もしかしたら学校の中では多少のあつれきはあるかもしれませんが、ミーティングでは、校長、教頭ばかりではなく、研究主任、コーディネーター、学年主任なども参加しており、情報共有しながら進めていけたらと思っております。

臥雲市長　もう１点、指定から外れている学校の先生方や保護者の皆さんの受止めという点では何かありますか。

大久保センター長　校長先生方は正直残念だったと受け止めたと聞いています。ただ、この事業を始めた一つの成果として、昨年、市内４８校の約半分の学校が、学校づくりの願いを先生たちと相談しプランニングして応募していただいた。そのような一歩を踏み出していただいていることが非常に大きな成果だと思います。地図ができると、その目的に向かって歩き始めることができる。それに対して、私たちが財政的、人的支援をするかしないかは次の問題で、まずその体制ができたというのは非常に大きいと思っております。

学校としたら、「人がいれば」、「お金をもらえれば」というのは当然あると思います。ただ、市教委としては、リーディングスクールは連れて行くが、そうでない学校は支援しないというスタンスは一切持たず、全ての学校に対して同じメッセージを送り続けたいと考えております。

臥雲市長　伊佐治教育長、今年の指定校が単年度ではなく継続するのか、あるいは対象校を来年度以降広げていくのか、いくとしたらどのような広げ方を考えるのか、現時点ではどうお考えでしょうか。

伊佐治教育長　できれば拡大をしていきたいという思いはありますが、新規事業として１，２００万円という破格の予算をつけていただきましたので、今の時点では簡単に拡大をお願いできないと思っております。荒井教育顧問からも、効果検証を行い客観的なデータをきちんと積み重ねましょうというご提案をい

ただきました。どのような取組みでどのような力がついたかという分析が必要だと思っております。

臥雲市長　保護者の立場から福澤委員はどのように受け止められましたか。

福澤委員　私の子どものことで恐縮ですが、幼稚園では年長さんが年少さんの世話をしながら幼稚園のルールを教え、３年経って自分が年長になったら逆に年少に教えてあげるということが自然にできていて、小学校に上がったときに、自ら何か課題を見つけて「あれをこうしたい」という思いがあったときに、同じ園にいた子には通じても、ほかの保育園や幼稚園から来たお友達には通じないという話を聞いたときに、そういった子どもからの声をくみ上げて、先生方がそれを導いていくためにはどうすればいいのか。子どもの気づきを多面に広げる取組みや、探究させることへの導き、課題を提起するときに、先生側から小学生に対して、こういうことをやってみないかと提案していくのか、それとも子どもたちから何か日頃の授業の中で気になったところを先生がくみ取って、探究的な学びとして広く取り上げていくのか。どのように事象の拾い上げや導きのきっかけづくりをしていくのかが気になります。

臥雲市長　子どもが問いを自ら立てることが、場合によってはハードルが高くならないか、先生と子どもの関係性はどうなのかという指摘だったと思いますが、大久保センター長、どうお考えですか。

大久保センター長　問いの持たせ方、課題の立ち上げ方は、学級で進める場合も、個人探究を進める場合も非常に大事なところだと思います。先日「学びの風だより」に、ある小学校の記事を書かせていただきました。４月のある日、生活総合の時間の立ち上げについて意見交換をした。テーマは「子どもの興味関心に乗っかるか、教師主導で始めるか」。非常に活発な議論が行われたようですが、出された結論は、いずれのスタートであっても体験を通して子どもたちの中に問いが生まれるかどうかが大切ではないかと。子どもにただ体験をさせて興味の赴くままに野放しにしていたのでは価値や問いは生まれてこないことから、教師が一定程度子どもの問いを導く手助けをしなくてはいけないし、逆に教師が示したものであっても、それを子どもがやる中で、問いが立ち上がってくればそれは子どものものになる。いずれにしても、その子どものものになっていくというプロセスを大事にしていくことが大事という

ことを、先生たちは議論の中で見つけました。そういうことを、全ての教師がお互いに学んでいくことが、私たちの願っている一つの現れでありまして、そんなことを各学校でも行っていけたらと思っています。

臥雲市長　荒井教育顧問、探究への導きや課題の立ち上げ方を学校の先生方がどこまで対応できるのか、これから対応するためには何が必要なのかといった観点でお話をいただけますでしょうか。

荒井教育顧問　この論点は、よく現場からも出される問いだと思います。子どもが先か、大人が先か、ということですが、大人主導で子ども主体の学校像を描いていくという松本市教育大綱の本質を考えると、子ども主体に物事を考えていく、あるいは子どもを主語にしていくということを避けて考えていくことはあり得ないと思います。大人が主導してはいけないとか、子どもに委ね過ぎてはいけないといった単純な対立構図では解決しえないチャレンジや試行錯誤を、現場では取り組んでいるのではないかと思います。

大人が体験や経験といった機会を主導して設定し、子ども主体で推進していく、「大人主導」で「子ども主体」の学びを実現していくという捉えを大切にしていくべきだと思います。

臥雲市長　春原委員、ご意見ございますでしょうか。

春原委員　私自身の経験を振り返ってみますと、同じことをみんなが一斉に学ぶといういわゆる一斉授業が長い間続いてきていまして、極端に言えば、私たちは知識の伝達者として来てしまったわけです。それではまずいということで、そこに経験・体験という現場主義をリノベートしながらやってきたと自覚しています。

旧来の子ども観であれば、子どもは未熟で不完全である。これに対して、子どもの尊厳を尊重するとなれば、生まれながらに有能な学び手だという全く相反する新しい捉え方になります。子どもは道徳的に劣っているから教えなければならないのではなく、子どもは本来道徳性を持っていて、人と違うところを矯正するのではなく、違いはかけがえのない大事なものと捉えるということでしょうか。子どもたちと我々大人は、「教える・教えられる」という関係から、「共に学んで共に育ち合う」関係に変えていかなければならないのではないかと思います。子どもは未来社会を支えるかけがえのない存

在です。生きていくために何が必要か、ぜひ子どもたちに学んでもらいたいと願うところです。

子ども観や授業観をどのように捉えるかは、現場の先生たちもきっと戸惑いを持っていらっしゃると思いますし、センター長が示された資料にもありますように、校長先生の願いと現実のハードルを考えたときにジレンマが生ずると思います。子どもたちといかに向き合うべきかという部分で、私自身も改めて深く学んでいきたいと思っています。

臥雲市長　今、春原委員から子ども観のお話がございました。新しい子ども観への共感、賛同のご意見だったと思いますが、極めて根本の大きな転換でもあり、学校の先生方が果たしてどこまで共感されているか、旧来の子ども観を捨て去ることが本当に必要なのか、実際にできるのかという点は、二者択一の問題ではないと思うのですが、子ども観の転換について、現場の先生たちは腹落ちしていると思いますか。

大久保センター長　自分のスタイルで重ねられてきたベテランの先生方は、新しい探究の在り方などを受け入れることがなかなか難しいという声は聞かれます。

ただ、あからさまに旧来の子ども観を口にする方は多くなく、どちらかというと心の隅に巣くっているもので、自分の授業のスタイルでうまくいっているのだから子どもは幸せだという考えを崩すのは難しいかなと思います。

まず、子どもがどう変わるか実践してみる。あるいは、実践している先生をみんなで見て方策を共有してやってみるところから、少しずつ変えていくことはできると思います。最近、学び直しあるいは学び崩しという言葉がありますが、これまでの見方をリフレーミングできる機会を提供していけたらと考えております。

臥雲市長　保護者の中にも必ずしも子ども観の転換に腹落ちしていない方もいらっしゃると思いますが、どう向き合ってベクトルを変えていくか、留意すべき点について、荒井先生はどうお考えでしょうか。

荒井教育顧問　ご指摘のとおり、人間の価値観を変えるのは非常に難しいですが、行政は伝えるべきメッセージをあらゆる形であらゆる機会で伝え続けていくことが大切です。「学びの風だより」もそうしたことを意識した取り組みの一つのはずです。こうした取組みをまだご存じでない保護者の方もいらっしゃる

でしょうから、ぜひメッセージを伝える機会を積極的に設けていただきたいと思っています。

臥雲市長　佐藤委員、ご意見をいただけますでしょうか。

佐藤委員　私も１８歳と１６歳の息子を持つ親という立場ですが、上の息子が小学校に上がったとき、「小学校はどう？」と息子に聞いたら、「自分で考えろと言われないから楽だ」という言葉が返ってきて、非常に強い危機感を抱きました。

保育園等では個性的な特色ある取組みをしているところも多く、息子も、常に次の行動をどうするのか、周りを見てどう考えるのかということを問いかける保育園に通っていたので、コントロールされる場に移り、「楽しい」ではなく「楽だ」という感想が出てきたことに非常に衝撃を受け、ずっと疑問を持っていました。リーディングスクールの取組みは、親としての立場からもとてもありがたい、歓迎すべき取組みだと考えています。

私自身が今関わっている言語教育でもそうですが、これからの時代、教師はコントロールする存在ではなくて、子どもたちの思考や発言を引き出していく役割、リフレクションに至るらせん状の取組みをファシリテートしていく役割、存在であると思っています。

それを教員の皆さんが現場で実現するためにも、先生自身がＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇの環境の中にいなければいけない、目に見えるもの・見えないもの両方の様々な制約から解放されていくことが必要だと思います。職場としても先生方が十分にＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇである状況を確保しないと、今後の担い手不足、良い人材に来ていただけないことにも同じく危機感を感じております。

先生方の負担が増している原因として、親の多様化や、本来家庭で担っていたものが十分に担えなくなってきているという社会的な構造の問題も同時にあり、一朝一夕に教育だけでどうこうできるものではないですが、広い視座の中で、リーディングスクールはどのような位置づけなのかという視点を見失わずに行きたいと思っております。

臥雲市長　就学前のほうが、異年齢集団での関係性を育んでいたり、自ら考えるという習慣づけが行われていたりしているということが現実としてあるのかなと、

改めて今お話を聞きながら思いました。だからこそ、このリーディングスクールをはじめとした探究的な学びへの取組みをスタートしたということだと思います。

先生自身がＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇであることが大事というご指摘がありましたが、そのために今必要なことという観点で、大久保センター長はどうお感じになりますか。

大久保センター長　うまくいっている学校は、先生たちが幸せそうだというのは明らかにあります。それは、業務が少ないから早く帰れるとかということでは全くなく、先生たちが自己効力感や仲間とのつながりを感じながら、サポーティブなリーダー層の関わりの中で、非常にやりがいを感じている。そういうときは学校がうまく回っていく。私たちも学校でそのような関係性が生まれるマネジメントを学校と一緒に考えて取り組んでいきたいと思います。

去年、波田小学校では、働き方改革を一つの窓口に学校の組織マネジメントの在り方を問い直したことで、今、先生方の関係性が非常に良く、学校全体に勢いがあり、授業改善にやる気を持って取り組んでいる状況が生まれ、校長が、学校が変わった、職員室が変わったと評価しています。そういう状況をつくっていくのも一つの大切な要素かなと思っております。

臥雲市長　　もう少し具体的にいうと、どのようなことを問い直したのですか。

大久保センター長　波田小はかなり大きな学校で、たくさんの先生たちがいる。先生方はみんな優秀で一生懸命やっているのですが、なかなか自分の願いが通らず、閉塞感があったところを、管理職を中心としたリーダー層が、みんなで知恵を出し合って自分たちで考えた改善策をやってみようという動きを生み出し、それによって先生方のコミュニケーションが非常に活発になり、様々な障害を乗り越えて、下校時刻を早めることを実現させました。その過程で先生たちの自己効力感の高まりがあり、それが次の一歩を踏み出すサイクルにつながりました。その過程で非常に豊かな会話が生まれています。対話をお互いたくさんすることが、物事を進めていくのに実は一番早道だという認識が先生方の間に広がっていく状況があります。

臥雲市長　　文字どおり、探究的な学びの実践を先生方がやったという話に聞こえました。

大久保センター長　おっしゃるとおりだと思います。

臥雲市長　　要は、先生方が気づきを整理して実行に結びつけ、成果をさらに次につなげることができれば、それが自身の力ややりがいになり、子どもたちにも良い影響を与えていくということでしょうか。

伊佐治教育長、改めて、どのようにこれまでの２か月、そしてこれから、どう考えていきますか。

伊佐治教育長　私も、４人の委員さんと似たように感じていたことがあります。

１点目は、就学前の学びがどうして学校につながらないのかということです。市立幼稚園に園長として再就職されたある校長経験者が、「自分はずっと学校の教員を務めてきたが、幼稚園で子どもたちが異年齢の中で、遊びを中心に自分たちでどんどんプロジェクトを動かしていく姿を見て、自分は教員生活で何をやってきたのかと、自分がやってきたことが全部ガラガラと崩れたような気がした」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。遊びを通して、子どもはもっとやりたい、もっと知りたいという欲求が湧き上がって、どんどん自分たちで立ち上がっていくとおっしゃっていました。

私も感動的だなと思ったのですが、それを実践していたのが明善小学校です。校長先生が強い思いを持って、小学１・２年生で、幼保の活動と同じような関係で、同じような学び方、遊びを中心に、子どもたちの興味や関心から湧き上がってくる学びを組み立てたプログラムを徹底していました。明善小学校の１・２年生の教室に行くと、保育園のような柔らかい学校らしくない雰囲気で、子どもたちも本当にいきいきしていました。校長先生は、「就学前と小学１・２年生の時期に、徹底的に自己肯定感を感じる環境で育った子どもは、３・４年生以降になっても打たれ強い、レジリエンスが育つ」とおっしゃっていました。今年、明善小学校はリーディングスクールになっていますが、教育振興基本計画に掲げた「学びに、遊びや体験を。」というのはこういうことだと実感しました。

もう一つは、最初に小柳委員がおっしゃったことに、新たな学び、新たな挑戦をしたいと思っても、不登校やいじめ、発達障害などで支援が必要な子どもたちが増えている現状に、先生方が苦しさを持っているということがありました。

私は、このリーディングスクールの取組みは、特別支援教育の研修や保護者理解のサポート、働き方改革などを、全部同時進行で進めていかないと、効果的にできないと思っています。こども部長時代、増加する待機児童への対応にはいろいろな課題が絡み合っていました。保育士不足や保育士の質の向上などを全部一緒に進めなければならず、中には、保育園のハード的な環境整備、保育士が働きやすく子どもたちも安全に守れる環境づくりもありました。それは学校も同じで、先生方と子どもたちのＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇを考えたときに、市内の学校が老朽化していく中で、長寿命化で予算を認めていただいていますけども、そのことも大切な視点だと思います。

臥雲市長　幼保小連携は、もう少し全市的に広げていくことはできないのでしょうか。あるいは課題は何なのでしょうか。

伊佐治教育長　明善小学校の取組みがすばらしいと思うのは、公立保育園だけでなく、私立の幼稚園、認定こども園とも連携して、定期的に職員が情報共有や意見交換をしているところにあると思います。今年３年目になるので、ほかにできる学校がないか、情報共有の場を活用して手を挙げてもらうことを考えていけたらと思っています。

臥雲市長　先ほどお話にあったこと以外でご発言ございませんでしょうか。

春原委員　「探究的な学び」、自ら学び考えるということは、非常に響きは良いですが、教師は効果的な方向に導くのが大変だと思います。校長先生の願いは熱くてとてもすばらしいと思いますが、現実のハードルは非常に高いので、できる限りバックアップし、力づけることが必要ではないかと思いました。２か月過ぎていますが、一つひとつ先を見通しながら、ぜひ支援をしていっていただきたいと思います。

臥雲市長　センター長も本意とするところは恐らく同じお気持ちではないかなと思いますが、いかがでしょうか。

大久保センター長　本来は、この事業のある・ないにかかわわらず、学校で乗り越えていかなければいけない、マネジメントの問題です。これを解決していくときに管理職だけが頑張るようなマネジメントでは駄目で、課題を共有し、より一つの上の目標、願いを共有すること、これだったらできるかな、やってみようよと、一つひとつ合意を形成して乗り越えていくマネジメントが望まし

いですし、それをやってくださいと、いろいろなところでお願いしているところです。

臥雲市長　ほかにご意見のある委員はいらっしゃいますでしょうか。

よろしいですか、教育長どうぞ。

伊佐治教育長　私もこの取組みを通して学校に対して、「学校はこうあるべきとか、今までこうやってきたとかを取り払ってください」と、改めてメッセージとして出し続けたいと思います。「挑戦なので、特定の指導方法がない、少し足踏みをしても工夫していくしかない」と、大久保センター長がおっしゃいましたが、風越学園に行った時も校長先生が、「私たちは日々実践して失敗を重ねながら子どもたちのために教育をつくっています」とおっしゃっていたので、それが松本でもできればいいと思いますし、保護者の皆さんにもそういう学校の姿を理解して応援してほしいということをメッセージとして送りたいと思います。

臥雲市長　荒井先生、最後にご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

荒井教育顧問　先ほどの波田小学校の例に対して、市長はその取り組みを共感的に受け止めていただき、嬉しく思います。まさに先生方による探究的な学びの具体的な過程を私たちに見せてくれているのではないかと思っています。松本市では「学びに、遊びや体験を。」というフレーズを使っていますが、ここでの「遊び」とは、チャレンジして、工夫して、うまくいかないことはなぜうまくいかないのか、うまくいったことはどうしてうまくいったのかなど、体験や経験を通じて、自分で、そして他者と共に考えていく機会をたくさん作っていくことが本質です。試行錯誤を繰り返す波田小学校の成果と課題を引き続き注目し、教育行政は伴走していただきたいです。

２点目に、本日のテーマは「リーディングスクール」でしたが、このテーマは、「学校の自律性をどう捉えるのか」という問いと繋がっています。ここでのポイントは、自分たちで考えた取組みを自分たちで決めていくという経験や体験を学校こそがどんどんしていかなければいけないという点です。自分たちで、テーマを設定し、子どもや保護者との対話を続けながら、これからの学校の在り方を考えていくことに対して、現状ではリソース自体厳しい部分もありますので、そこは教育行政がしっかりサポートして伴走してい

くことが大切だと思います。

３つ目ですが、忘れてはいけないのは、教職員のＷｅｌｌ－ｂｅｉｎｇです。学校の先生が元気だと、子どもも元気です。先生がご機嫌だと子どもにもそれが伝染します。大変なことも多々ありますが、充実した学びを共に創造していこうとする雰囲気をつくっていくためには、学校に裁量をできるだけ与え、自分たちで決めている、決めていくという感覚や、自己効力感あるいは組織効力感とも言ってもいいかと思いますが、組織として物事を決めていく経験が、リーディングスクールの取り組みで増えていけばいいと思いますし、市内の学校にも波及していく方法も検討していただけたらと思っています。

リーディングスクールは現在８校ですが、私としては市内の４８校全校で目指してほしいと思っています。「学びの多様化」とは、「学校の個性化」です。個性は周囲の「眼差し」によって変化するものでもあります。引き続き伴走型教育行政の役割を果たしていく必要があります。

臥雲市長　この事業がスタートして、まだ、いわば模索の段階かもしれませんが、探究的な学びという子ども観の転換を土台とした取組みを、今、松本市の小中学校で進めていただいています。

最後の荒井先生の言葉が非常に印象的でしたが、学校が自分たちで決めるという学校の自律性の基盤を、教育行政がどうつくっていけるかということが、実は今の日本の公教育にとっての根本問題だと感じました。そのことが実現していけば、それぞれが非常に個性的で、自分たちが理想とする学びを先生たちや子どもたち、保護者の皆さんと一緒につくっていく方向に進んでいくと思いました。

私としては、メッセージを伝え続けていくことが重要だということを肝に銘じたいと思います。今、実際にチャレンジしている学校現場の情報や取組みを、できるだけ広い範囲にいろいろなチャネルを使って伝えていくことを、松本市として教育委員会の取組みに重ねて進めていきたいと思います。

そして、荒井先生から、８校から４８校へというご提案もいただきましたので、私としても現実と理想の狭間で頑張らなければいけないなと思った次第です。

長時間にわたり、ありがとうございました。

《閉会宣言》

教育次長　　令和５年度第１回松本市総合教育会議を閉じる旨宣言した。

<午後４時３３分閉会>

会議録調製職員　　教育政策課教育政策担当係長　　伏見　宏美